

## ビーチとヤシの木と電顕と

釜澤 尚美



Max Planck Florida Institute for Neuroscience はヨーロッパ以外では初の Max Planck 研究所として、2012年12月に米国フロリダ州、Jupiterの街で開所式を迎えた。私は2011年6月に、電子顕微鏡施設の責任者 (Facility Leader) として文字通り何もない研究室に着任し、施設の立ち上げ作業を始めた。そして今、研究所の中核施設 (Core Facility) として Max Planck だけでなく、Scripps Florida Institute, Florida Atlantic University の研究プロジェクトをサポートしながら自らの研究の立ち上げに奔走している。と、こう書くと、情熱と野心に満ちて渡米したように聞こえるかもしれないが、実際はそこまで気合いが入っていた訳ではない。

フロリダに脳のイメージングを目指した研究所ができる、そして電顕施設を運営する人材を募集している、という話を生理学研究所の元同僚から聞いたとき、私の頭に浮かんだ図は、フロリダ=マイアミバイス=ポートとオープンカーとビキニだった。あ〜、ちょっと行ってみたいかなあ、とりあえず、Go Go Florida! なノリだった。国際電話での面接、来所してのセミナーと面接は、とにかく勢いで乗り切った気がする。今こうして、窓の外にはヤシの木と青い空、ビーチはすぐそこというリゾート地で電顕生活をするようになったのだから、何でもやってみなくちゃわからない。自分の心の声が聞こえた時にはとりあえず乗ってみる、そういう選択方法もありかもしれないと思って頂けたら嬉しい。

研究室の立ち上げは、ピペットなどの細々とした備品、試薬から、電顕本体、周辺機器に至るまで、あれもこれも必要な物はすべて購入するという、まさに一生に一度のセレブなお買い物体験で始まった。とはいうものの、ラボに普通にあるものをすべて買うというのは想像以上に大変だった。頭の中で実験を想像して、たとえば、緩衝液一つをつくるにしても、試薬、薬包紙、薬さじ、ピーカー、スターラー、スターラーバー、秤、pHメーター、と、本当に普段いかにあたりまえに物を使っていることか。加えて、アメリカの事務処理と配送業務のいい加減さは想像を超えていて、一旦発注したらその品物が届くまでは毎日電話をかけ続けるくらいの気合いが必要だ。ガラスシャーレが届くまで「たったの」3か月かかったり、いつまで待っても来ない試薬の確認をしたら製造中止になっていたり、一方では、オーストリアから出荷された機器が、書面上は出荷と同日にフロリダ到着したり、

しかも大混乱の挙げ句によく届いた請求書の数字がまったく違っていたりで、なんで〜? と何度叫んだかしのれない。日本って本当にきちんとした国だとあらためて感動した。着任から3か月後、ようやく初めてラボで試料作製をし、最後までプロトコルを終了した時は感動的だった。

こういう実務はもちろん、研究の相談をする時も、とにかく何をやるにも、アメリカ生活の基本は「言ったもの勝ち」で、とにかく口に出さなくては何も始まらない。純粋に日本の「察する」文化の中で育った頭には、語学の壁以上に、自分が何をしたいのかを常に主張する姿勢でいることに体力を消耗する。が、だんだん開き直って慣れてくると、研究を含めたビジネスの会話では、言葉の裏の裏を読む必要がない英語文化の方が実は簡単かもしれないと思えてきた。同時に、言葉にする事で自分の意識が高まるのも事実だと感じる。自分以外には電顕を知っている人がほほいさない環境で、電顕と形態学の重要性を伝えるために、「各プロジェクトに最適な電顕手法を用いて、最高のデータを提供します」と(かなり偉そうに)言っただけで、自分の責任を自覚しているのが現状だ。ただ、こういう生活を続けているから、私のおばちゃん度は格段にアップしたに違いない。

電子顕微鏡学という授業がある数少ない大学に学び、その後も電顕を軸にした仕事をしてきたけれども、電顕が好きだと思った事は実は一度もなかった。正しく可視化することの重要性を訴え続ける人間がいなくてはならないという風に自覚したのはごく最近だ。それなのに今、電顕や構造に関する「超オタクなこだわり」を人に向かって意見している。「形態学は生理学の確認データ」という考えが主流の現在においても、「見てみなくちゃわからない」ことはまだまだ沢山ある。だからこそ、電顕は生理学のそばにあって、構造を正しく可視化して提供し、他分野の研究者と日常レベルで話ができてはいけないと思う。今、ここ Jupiter の研究者達を相手に、電顕は何が出来るのかを、立ち話の中で「営業活動」できる環境を最大限に活用してみたい。なんでも行き当たりばったりで、うまくいかなかったらその時考えるという、いい意味で前向き思考なアメリカ文化の中で、彼ら以上に脳天気になんか、とにかく、どこまでできるか、やってみなくちゃわからない! と。